

始めと終わりを私は見た

井 上 勝

「ジェファソン」と「オクスフォード」

25年前の1984年8月半ば、私は生まれて初めてパスポートを使って旅をした。行き先はニューヨークでもなく、ボストンでもなく、ミシシッピ州オクスフォードであった。William Faulkner (1897～1962) の作品群の舞台となっている“Jefferson, Yoknapatawpha Co., Mississippi”のモデルとされている同地を自分の眼で見、土地の雰囲気や自分の肌で感じるためであった。1月余り滞在し、オクスフォードの観光案内地図を片手に、町中を歩き回った。ここでフォークナーの架空の町、Jeffersonと現実にあるミシシッピ州の町、Oxfordを「」で括っているのはいずれもが私の極めて個人的な体験をもとにしているからである。

1ヶ月余りのオクスフォード滞在中に私は当時ミシシッピ大学学内在住作家であったWillie Morris (1934～1999) という知己を得た。モリス氏はその5年後の1989年に*National Geographic* 誌の3月号に特集記事として“Faulkner’s Mississippi”を書き、その記事に加筆して、*Faulkner’s Mississippi* を翌1990年にOxmoor Houseから出版した作家でもある。

彼は、1981年以来*The Faulkner Newsletter & Yoknapatawpha Review* という季刊紙を発行していて、作家でもあるフォークナーの姪夫妻を始め、オクスフォード市長、ミシシッピ州下院議員、ミシシッピ大学教員等、多くの土地の人たちを紹介してくれた。その人たちとの出会いで私は多くのことを知った。

例えば10歳の少年のことである。少年の父親は株式仲買人であった。そのためにも私は少年の話に興味を持ったともいえる。少年はゴルフ場でプレイヤーが池に打ち込んだボールを拾いに行かないのを知ると、パンツ一枚になって池に入ってボールを拾ったのだという。池に入ってみると、底には他にもボールがたくさんあることに気づいた。池から上がった少年は、今度は袋を持って池に入り、

拾える限りのボールを袋に入れた。問題はその後である。少年はボールの値段を訊ね、聞いた値段よりも安く売ろうとしたという。少年の母親はその話を誇らしげに話し、息子には金儲けの才能があると自慢し、息子の将来は素晴らしいものになるはずだと言ってのけた。

誇らしげに息子のエピソードを語る母親の言葉に耳を傾けながら、私が思い浮かべていたのは *The Sound and the Fury* (1929) に登場する Jason Compson のことであった。ジェysonは子供の頃、いつもポケットに手を突っ込んでいる子であった“Jason came behind us, with his hands in his pockets.” (*The Sound and the Fury*, 23)。倒れそうになっても、ポケットから手を出さない子であった“*He had his hands in his pockets and he fell down. Versh went and picked him up.*” (27)。そしてコンプソン家に仕えている黒人のヴァーシュに次のように言われたりする“*His [Jason’s] hands were in his pockets. “Jason going to be rich man.” Versh said. “He holding his money all the time.”*” (42-43)。彼は子供仲間て風を作って売るときには「会計係」「treasurer」(116)であった。

成人したジェysonは自分の娘を一家の当主となっている彼に預けざるを得なかった姉のキャディー (Caddy) が娘のために毎月送ってくる養育費をくすね、自室に金庫を備えて現金で溜め込んでいる。他方では棉花相場に投資して儲けようとするが、相場は彼の思惑通りには展開せず、儲けるどころか損失を出しているようである。彼は、結局は自分がこつこつと溜め込んだ金とくすねた養育費の両方を姪のクウェンティン (Quentin: 彼女の名前はキャディーの兄であるクウェンティンと同名) に持ち逃げされてしまう。彼は彼がその中で生きていかなければならない「さもしい物質主義の世の中」“*the crass material world*” (279) で血も涙もない卑しい拝金主義者とされている。

フォークナーは1957年に“Your work has sometimes been compared with that of Hawthorne’s tales with hard-hearted people like Jason. Do you think that one of the things that’s wrong with the South is that there are too many characters like this, like Jason Compson, in it?” という質問に、“Yes, there are too many Jasons in the South who can be successful, just as there are too many Quintins in the South who are too sensitive to face its reality.” (Joseph Blotner, *Faulkner in the University*, 17) と答えている。物質主義 (拝金主義) 的なあまりに血も涙も無くしてしまう人が余りにも

多いということである。オクスフォードが、少年の母親の発言が飛び出すような社会であれば、1928年であれ、1957年であれ、1984年であれ、そこもまた本質的には同じ拝金主義的社会だということになる。それがアメリカだといってしまう、それまでではあるが。

フォークナーは1936年に発表した *Absalom, Absalom!* の巻末に彼自身が唯一の所有者にして占有者である (WILLIAM FAULKNER, SOLE OWNER & PROPRIETOR) 地図、“JEFFERSON, YOKNAPATAWPHA CO., MISSISSIPPI”を添付した。地図ではヨクナパトウファ郡の北でタラハッチー川が東西に流れ、南ではヨクナパトウファ川が同じように東西に流れている。地図の中にはそれまでに発表された作品の物語の場が書き込まれている。南北で東西に流れる2つの川に挟まれた地域がヨクナパトウファ郡である。それは若干のずれはあるもののラファイアット郡の地図と一致する。但し、ラファイアット郡の北で隣のマーシャル郡との郡境となって流れる川は同名のタラハッチー川であり、南の川はヨコナ川である。ラファイアット郡が丘陵地帯であるように、ヨクナパトウファ郡も丘陵地帯であり、オクスフォードが丘の上にあるように、ジェファソンも丘の上にある。オクスフォードがラファイアット郡の郡庁所在地であるように、ジェファソンはヨクナパトウファ郡の郡庁所在地である。その限り、オクスフォード=ジェファソンという図式は成り立つ。しかしオクスフォードにミシシッピ大学はあるが、ジェファソンに大学はない。

地図の中で彼はヨクナパトウファ郡の面積を「2400平方マイル」とし、人口を白人が「6298人」で、黒人が「9313人」としている。郡の人口は15,611人で、白人と黒人の比率は白人がほぼ40パーセントで、黒人がほぼ60パーセントということになる。人口は黒人の方が上回っている。その当時、ラファイアット郡に3区ある下院議員選挙区のうちの1区を選挙区としていた州下院議員は、ラファイアット郡の面積はそんなに広くない、ヨクナパトウファ郡の4分の1程度だと言い（後でラファイアット郡の面積は669平方マイルだと教えてくれた）、この郡で黒人の人口が白人の人口を上回ったことは1度もない、現在（1984年）でも黒人の人口は34パーセントに過ぎない、と教えてくれた。そして彼は、フォークナーの事実認識は誤っている、と指摘した。因みに彼はその17年前初当選で議会へ出たとき、フォークナーの作品を読んでおらず、そのために恥をかき、そ

の後発表年順に全作品を読んだという人であった。

州下院議員はヨクナパトウファ郡がラファイアット郡をそのまま写していると
するからそのような発言をしたのであった。しかしそれは無理からぬことであ
った。ジョゼフ・プロットナーがカルヴィン・S・ブラウンの研究を踏まえつつ言
及しているように、フォークナーがラファイアット郡、そしてオクスフォードを、
あるいはそこで生起したことを、様々な形で作品に利用したからである。プロ
ットナーは“According to one scholar, a native of Oxford, Faulkner ““normally accepts
the physical facts of Oxford and of Lafayette County as coinciding with those of his
Jefferson and Yoknapatawpha County.”” He would use many clearly identical places and
geographical features, changing their names and usually altering their features.”(*Faulkner:
A Biography*, 251) と指摘している。

オクスフォードのほぼ中央に courthouse square があり、広場の中央に郡庁舎が
あった。郡庁舎の南前に4～5メートルの高さのある台座の上に南を向いて立
っている南軍兵士像があった。兵士像は台尻を足元につき、銃身の先端を両手で
持っていた。その兵士像は *The Sound and the Fury* の中で “They [Luster and Benjy]
approached the square, where the Confederate soldier gazed with empty eyes beneath his
marble hand into wind and weather” (399) と描かれている。この兵士像と現実
にある兵士像は同じではない。けれども、フォークナーが描いた像とまったく同
じ兵士像が郡庁舎から西へ約1マイル離れたミシシッピ大学の構内の Lyceum と
呼ばれる大学本部の前にある木立の中に立っている。フォークナーは *The Sound
and the Fury* の中で、郡庁舎前の兵士像を大学内にある像と取り替えたのである。
しかし、この取替えも、土地の人にとっては、大学内にある兵士像を郡庁舎前へ
移動させたと言うことに過ぎず、ジェファソンはオクスフォードではない、とい
うことにはならないのであった。

コンブソン家の敷地についても同じである。コンブソン家はジェファソンの中
心部に位置し、広大な敷地を所有していた。同家は敷地の一部である草地をゴル
フ・クラブに売り渡して、長男のクウェンティンをハーヴァード大学へやるため
の資金にしている。けれども、そのようなことはジェファソンでは可能でも、オ
クスフォードでは不可能である。しかし、そのようなことを土地の人は気にもし
ていない。

更に言えば、*Absalom, Absalom!*の中でオクスフォードはミシシッピ大学の所在地として言及され、“that forty miles between Oxford and Jefferson” (*Absalom, Absalom!*, 128) とオクスフォードとジェファソンの間には距離があるとされている。オクスフォードとジェファソンは離れた所にある、別の町であるとされているけれども、土地の人はそのことなどまったく意に介していなかった。

しかしジェファソンとオクスフォードが「40 マイル」離れているというのは重要なことである。どこからともなく、突然ヨクナパトウファ郡へ現れた Thomas Sutpen がやがて未開の原野を切り開いて、「サトベン百平方マイル荘園」“Sutpen’s Hundred” (*Absalom, Absalom!*, 9) と呼ばれることになる大きな棉花荘園を創設し、南北戦争後荘園もろとも壊滅していく物語が *Absalom, Absalom!* だからである。フォークナーは、例え僅かな期間でしかなかったとしても、棉花生産で栄華を極めた人物を設定し、物語を進めていくうえでは、その物語の場を棉花の大生産地におく必要があったのである。棉花の大生産地はミシシッピ・デルタである。デルタは普通河口の三角洲のことをいうが、ミシシッピ・デルタは、凸レンズの形をし、北はテネシー州との州境から南はミシシッピ州ヴィクスバーグまで約 200 マイル、東西は最も幅のあるところで 60 マイルはある肥沃で平坦な土地である。現在でもそこは棉花を主産物とする。オクスフォードから西へ「40 マイル」行けば、ミシシッピ・デルタである。

モリス氏には幾つかの場所へ連れて行って貰った。その 1 つはクウィットマン郡のファルコン村だった。私はファルコン村を知るはずもなく、その村に関心があるわけでもなかった。しかしファルコン村がミシシッピ・デルタにあり、オクスフォードの西 40 マイルにあると言われて私は案内して頂くことにしたのであった。ミシシッピ・デルタに足を踏み入れることができるとは予測もしていなかったし、期待してもいなかった。

オクスフォードから西へ向かってラファイアット郡のなだらかな起伏のある丘陵地帯の最後の坂を降りると、平坦な地に街が広がっていた。パノーラ郡ベイツヴィルである。平坦なベイツヴィルを抜けると、どこまでも平坦に続く道路の両側には棉花畑が広がり、同じ風景が続いた。時折大豆畑が顔を覗かせることもあった。オクスフォードを出て、40 分程走ってクウィットマン郡の標識が見えた。標識の辺りはオクスフォードから 40 マイルのところということになる。フォー

クナーがオクスフォードとジェファソンの間に置いた距離「40 マイル」は、オクスフォードから西へ「40 マイル」行けば、ミシシッピ・デルタであるという意味的を射ていたのである。マークスという町で北上して暫くするとそこがファルコン村であった。ファルコン村は8月の暑さの中に物憂げにぐったりと横たわっている村だった。村へ差し掛かったかと思うと、すぐに通り抜けてしまうような小さな村だった。

モリス氏は車をゆっくりと村の中へ走らせた。黒人の老夫妻が庇の下で団扇を扇ぎながら、椅子に座っている家が1軒あった。他に人影はなかった。そして元の道路へ戻ったとき、彼は私がウィリアム・スタイロンに続いて2番目にそこへ案内した人だと言った。そして彼は言った、村の住人はすべて黒人である、と。彼は村の人口には触れなかった。翌年州下院議員が送ってくれた、州が4年毎に知事選挙の後に発行している *The Mississippi Official and Statistical Register 1984-1988* によると、1980年のファルコン村の人口は260人であった。

モリス氏は帰りの車中で思いつくままに幾つかの郡の黒人と白人の人口の比率に触れた。ハンフリーズ郡黒人80パーセント、レフロア郡同じく黒人80パーセント、サンフラワー郡・・・彼が挙げた郡名はいずれも黒人の人口が白人の人口を上回っている、というよりはるかに上回っている郡であった。クウィットマン郡の比率は示されなかった。彼が言っていたならば、私はメモしたはずである。彼の関心は黒人だけの村、ファルコン村にあった。オクスフォードの近くで黒人だけの村あるいは町はファルコンだけであっただろうからである。ともあれ、彼が挙げた郡名は地図を捲るといづれもミシシッピ・デルタにあった。周囲に棉花畑が広がるファルコン村はミシシッピ・デルタにある黒人だけの小さな村だった。

ここでヨクナパトウファ郡のモデルは、ジェファソンがオクスフォードから「40マイル」離れているとされていることを根拠にして、クウィットマン郡であると言おうとしているのではない。棉花生産によって栄華を極めたのが旧南部であるとすれば、それを象徴的に表しているのはミシシッピ・デルタであって、そうである限り、ヨクナパトウファ郡はミシシッピ・デルタのどこかに位置付けられなければならないのであり、ミシシッピ・デルタに位置付けなければならないのであれば、ヨクナパトウファ郡の人口もまた黒人の方が白人の方を上回っているのはまったくその通りであることを確認しておきたいのである。

モリス氏が案内してくれたもうひとつはカレッジ・ヒル長老派教会だった。カレッジ・ヒル長老派教会はフォークナーが1929年6月20日に結婚式を挙げたところであり、*Absalom, Absalom!*の中で、トマス・サトベンが結婚式を挙げた教会のモデルとなっている教会でもある。私は案内して貰う前に1度そこまで歩いてきた。町から片道2時間以上は歩く距離であった。彼が車で案内してくれたのは、私が教会の墓地は見えないと言ったからであり、おそらく、私に墓地を見るために真夏の暑い中をもう1度2時間以上の距離を歩くようにとは言えなかったからである。

彼は教会の敷地で車を止めるなり、墓地へ向かった。そしてある1つの墓へ直行した。例えばSt. Peter's Cemeteryなら、そこにノーベル賞受賞作家フォークナー等が埋葬されていることを案内板によって知ることができる。しかし長老派教会の墓地には案内板などなかった。モリス氏はその墓を探し当てていたのである。それは無名の元南軍兵士の墓であった。

墓石には風に翻る「南部軍の歩兵連隊旗」が刻まれていた。旗の下には“JAMES EDWARD HOPE / DIED NOV. 14, 1907, / BORN AT COLLEGE HILL / JULY 29, 1842, / YOUNGEST CHILD OF LEVI HOPE & JANE M. HARRIS / OF CABARRUS COUNTY N. C. / SERVED AS ENSIGN 30 MISS. / VOLUNTEER INFANTRY / CONFEDERATE ARMY / A TRIBUTE OF LOVE”と10行が刻まれていた。故人はノース・カロライナ州出身の両親のもと、カレッジ・ヒルで1842年7月29日に生まれ、南部連合軍第30ミシシッピ義勇歩兵連隊に歩兵少尉として従軍し、亡くなったのが1907年11月14日である。モリス氏が数ある墓石の中からその墓石へ直行したのは、故人が結婚していないLevi HopeとJane M. Harrisの間に生まれ、Levi Hopeによって認知された人であることを示すためではなかった。モリス氏は、南北戦争での敗戦後42年が経過してもなお故人が、あるいは故人の遺族が、故人が「南部軍の一員」として戦ったということに拘っていたことを示したかったのである。もっとも故人が亡くなった時期と言えば、大学のキャンパスに南軍兵士像、それに続いて郡庁舎前の兵士像が建立されたときであり、そのような動きの中で「南部軍の歩兵連隊旗」が刻まれたのかもしれない。それら2つのことに関係があったにせよ、なかったにせよ、土地の人たちが南部軍兵士への拘りを見せていたことに変わりはない。兵士像の建立に際してはフォーク

ナーの祖母もかかわっていた。彼女はオクスフォードの町にも兵士像が建てられるべきだと強く主張したのである。祖母は兵士像が郡庁舎前に建立される前に病で亡くなり、それを自分の眼で見ることはできなかった (*Faulkner: A Biography*, 21-22)。

モリス氏によると、第一次世界大戦の頃まで、ミシシッピでは7月4日を祝わなかったのだという。1863年7月4日にヴィクスバーグがユリシーズ・グラント将軍に攻め落とされたからだという。ついでに言えば、1984年の時点ではミシシッピ大学のシンボルとして「南部軍の歩兵連隊旗」が使われ、マスコットは“Colonel Reb(el)”であり、大学のスポーツ・チームの愛称は“Ole Miss Rebels”であった(但し、1989年以降大学のシンボルとしての旗は中央にMを配置したものに変わり、マスコットは2000年時点では“Colonel Reb(el)”が廃止されたまま、新しいものはまだ決まっていない)。地元ミシシッピ大学で開催されたフットボールの定期戦では“Ole Miss Rebels”が敵陣へ攻め込むたびに観客席のいたるところで無数の大小様々な「歩兵連隊旗」が打ち振られ、喚声と喊声が沸き立った。そのようなこととの関連から、モリス氏は墓石に刻まれた「南部軍の歩兵連隊旗」に、そしてその墓を立てた遺族の姿勢に「南部人」の一端を示してくれたのである。フォークナーが長老派教会の墓地の墓碑を見たのかどうかはわからない。けれども名も無い兵士の墓碑は「南部軍の歩兵連隊旗」はさておくとして、軍隊での階級をも墓石に刻んでいるという点で、*Absalom, Absalom!* のトマス・サトペンの墓碑を思わせるものであった。

サトペンの墓碑

ある日クウェンティンが2頭の猟犬を連れて父親と鶉狩に行ったとき、糠雨が降り出す。そこで2人は雨宿りをしようとして、杉の森へ入る。獲物を探し回っていた2頭の猟犬のうち1頭が何かを見つけたような合図を送る。2人は犬のところへ行ってみて、そこで2枚の平たい大理石の厚板を見つける。サトペン夫妻の墓であった。糠雨が降り出さなければ、コンプソン親子が雨を避けるため雨宿りをしようとしなければ、猟犬が探し当てなければ、2枚の平たい大理石の厚板を見つけることはなかったということになる。つまり、サトペン夫妻の墓はすで

に忘れ去られ、どこにあるのかさえわからないものであったことになる。その所在を誰もが知っているような墓ではなかったわけで、所在がわからないのであれば、探そうにも探しえないものである。探し当てたのは獵犬であったわけだから、人間の感覚では探せないものであった。

Absalom, Absalom! は、先に少し触れたように、どこからともなく、ヨクナパトウファ郡へやって来て、未開の原野を切り開き、「サトベン百平方マイル荘園」と呼ばれる大きな農園を創設して、消えていったトマス・サトベンの一代記である。*Absalom, Absalom!* の巻末に添付された登場人物の系図（物語の中では1863年となっているエレンの没年月日は1862年となっている）によれば、1891年に生まれたとされるクウェンティンにとって彼が生まれる22年前の1869年に死んだサトベンは現実にはいない伝説上の人物であったことになるが、サトベン墓があることによって伝説の人物から実際に存在した人物へと変わったことになる。鶉狩で「偶然」に見つけたサトベンの墓はサトベンが存在したことを保証するものである。

トマス・サトベン夫妻の墓については次のように描かれている、

Both the flat slabs were cracked across the middle by their own weight ... though the lettering was quite legible: *Ellen Coldfield Sutpen. Born October 9, 1817. Died January 23, 1863* and the other: *Thomas Sutpen, Colonel, 23rd Mississippi Infantry, C.S.A. Died August 12, 1869* : this last, the date, added later, crudely with chisel, who even dead did not divulge where and when he had been born. Quentin looked at the stones quietly thinking *Not beloved wife of. No. Ellen Coldfield Sutpen* “I wouldn’t have thought they would have had any money to buy marble with in 1869,” he said.

“He bought them,” Mr Compson said. “He bought the two of them while the regiment was in Virginia, after Judith got word to him that her mother was dead. He ordered them from Italy, the best, the finest to be had — his wife’s complete and his with the date left blank:...” (*Absalom, Absalom!*, 188)。

墓石はクウェンティンの父親、コンプソン氏によると、南北戦争の最中エレンが亡くなったという知らせを戦地で聞いたサトベンがわざわざイタリアから取り

寄せた大理石ということになっている。墓石が戦争の最中にわざわざイタリアから取り寄せられた最高にして最良の大理石であるとすれば、それはそれだけサトベンが墓に深い関心を示していたということである。そして彼はエレンの墓碑を刻み、自分の墓碑も（没年の）日付だけ空白にして刻んでいたとなれば、彼の墓に対する関心あるいは拘りが如何に大きなものであったかがわかる。墓はそこに「埋葬されている人」が「いる」ことを証明し、保証するものである。墓に刻まれた碑は埋葬されている人について簡潔に記録することによって更にその証明を補強するものである。サトベンが自分で墓石を用意し、墓碑をも刻んだということは彼が自らの関心と判断によって自らの存在を証明しようとしていたことになる。彼には自分が存在したことを後世に伝えるつもりがあったということである。それを考えるとき、サトベンの墓碑は不可解なものである。生前のサトベンが墓碑として用意したのは自分の姓名と「南部連邦国第 23 ミシシッピ歩兵連隊大佐」という軍隊での階級だけだからである。彼は自分の生年月日を刻まなかった。自分が存在したことを証明しようとしたサトベンが生年月日を刻まなかったことが不可解である。生年月日が不明であることはその人の存在そのものが不明だということである。

サトベン夫妻の墓石が南北戦争の最中にサトベン自身によってわざわざイタリアから取り寄せられたということは事実であろう。そのようにまでして手に入れたのが墓石であれば、墓を建てたサトベンが先に亡くなった妻に何か言葉を添えていてもいいはずだ、例えば「トマス・サトベンの最愛の妻」というように、とクウェンティンは思っている。しかしサトベンは妻エレンの姓名と生年月日・没年月日を刻んでいるのみである。それはトマスとエレンの間の夫と妻として関係の問題である。その関係は両者の姓名の表記から見える。サトベンの場合ただトマス・サトベンとなっている。サトベンの姓名がただのトマス・サトベンになっているのは彼に洗礼名がなかったか、あっても彼が無視したか、のいずれかである。あるいは彼には彼が継いだ墓碑に記すに値するミドルネームがなかったということである。エレンの場合はエレン・コールドフィールド・サトベンとなっていて、ミドルネームとして、彼女の生家であるコールドフィールドの姓が加えられていることからすれば、彼には後世に残せる程のミドルネームはなかったということになる。またエレンの場合にミドルネームとして生家の姓をも加えてい

るということは、コールドフィールド家が由緒ある旧家ではないとしてもそれなりの家だとされていることから、サトベンにとって後世に残すものとして意味を持つものであることになる。エレンはそれなりに出自がしっかりしているコールドフィールド家の出で、結婚によってサトベン姓を名乗ってくれた1人の女であったということになる。彼の子孫は出自がはっきりしているエレンを通して「どこかの馬の骨」でしかない者の子孫であることから「ある社会の一員」としての場を持つ者の子孫へと変身しうるのははずであった、ということをも物語っている。

サトベンの墓にも没年月日は刻まれている。それは後になって鑿でぞんざいに加えられたことになっている。それが先に少し触れたように、サトベンが墓石に刻んだのは自分の姓名と「南部連邦国第23ミシシッピ歩兵連隊大佐」だけだということである。もっとも人は誰も自分の没年月日を自分の墓石に刻むことはできない。サトベンの没年月日はサトベン以外の誰かが刻んだことになる。1869年8月12日に彼の死を確認し、その日付を墓石に刻んだ者がいたということである。サトベンの娘Judithであった。繰り返しになるが、没年月日だけが後で刻まれたということは没年月日を除いた部分はサトベン自身が生前に刻んでいたということである。サトベンが自分の墓石に刻んだのは自分の姓名と自分が「南部連邦国第23ミシシッピ歩兵連隊大佐」であったことだけであった。

彼は自分が存在していることを確認しようとしたとき、墓碑に「サトベン百平方マイル荘園の唯一の所有者にして占有者」と刻むこともできた。それがヨクナパトウファ郡での社会的位置であったからである。未開の原野を切り開き、大荘園を創設したのだから、その是非はともかくとして、それはそれで十分な意義がある。しかし彼は共に消えた「大荘園」と「南部連邦国」の中から「南部連邦国」の方を選び取り、トマス・サトベンという人がいたことと、そのトマス・サトベンという人は南部連邦国の大佐であったことだけを墓碑によって残そうしていたということになる。彼が全精力を傾けて創設した「サトベン百平方マイル荘園」は彼にとっては何の意味もなかったということでもある。フォークナーはサトベンに南部連邦国を選ばせたということになる。それはエレンとの婚姻によって、自分ではなく、自分の子孫を変身させようとしたことと同じである。彼は南部連邦国の軍隊の大佐となりえたことによって、自らをこの場合はヨクナパトウファ郡という1地域ではなく「国家」というより大きな社会の成員と生きたというこ

とである。そしてそれに拘ったのである。それが、*Absalom, Absalom!* が単にサトベンの物語であるだけでなく、サトベンの人物像を問い直したとき、サトベンという1人の人物の物語を通して、サトベンのような人物を生み出した南部の物語ともなっているということになる。南部連邦国はサトベンのような人たちによって生み出され、維持され、崩壊した国ということになる。

サトベンの姓名と「南部連邦国第23ミシシッピ歩兵連隊大佐」は生前のサトベン本人が刻んだものであるから、墓石に彼の出生地も生年月日も刻まれていないということは確かに彼が死ぬときでさえ、自分が「どこで」「いつ」生まれたかを漏らそうとしなかったと、クウェンティンは理解している。そのようにサトベンを位置付けている。墓があるということはその墓に埋葬されている人がこの世の中に存在したことが保証されているということである。その墓に生年月日が刻まれていないことはそもそも被埋葬人はこの世に生まれていたのかという疑念に繋がる。それは、ヨクナパトウファ郡へどこからともなく現れ、「サトベン百平方マイル荘園」を創出したサトベンが、「歩く影」(a walking shadow) あるいは蜃気楼、つまり実体を伴わない現象、のようなものではなかったかということ物語る。サトベンが蜃気楼のようなものであるとすれば、彼が大佐であったことも蜃気楼となり、彼の所属した第23ミシシッピ歩兵連隊が、第23ミシシッピ歩兵連隊を動かした南部連邦国が蜃気楼としてしか存在しえなかったということを示唆する。モリス氏は *Terrains of the Heart and Other Essays on Home* (1981) の中で南部文化について「そもそも実際には存在しなかったかも知れず、確実なことは私たち [南部人] が願っていたようには存在しなかった、消え失せた文化」(a vanished culture which may never have truly existed in the first place, certainly not the way we wished it to) と言っている。

Absalom, Absalom! にトマス・サトベンは登場しない。物語の登場人物は彼と直接関わり合った Rosa Coldfield (エレンの27歳年下の妹) であり、サトベンと同時代人であり、ローザと同じように直接サトベンと関わりあっていた父親からサトベンの物語を聞いたクウェンティンの父親、ジェイソン・コンブソン氏、であり、そのジェイソン及びローザからサトベンの物語を聞かされたクウェンティンであり、ハーヴァード大学でのクウェンティンのルームメイトでサトベンとはまったく関わりのないカナダ人の Shrevlin McCannon である。サトベンはローザ

の、コンブソン氏の、クウェンティンの、そしてクウェンティンが自分で入手できた事実（サトベン夫妻の墓石等）を加えていくなかで、彼と一緒にサトベンの姿を探っていくあるいは再構築していくシュリーヴの語りの中に登場するだけである。それはサトベンが彼について語る他者の関心の中にしか存在しないということである。しかし人には自分の知っていることにしか言及できないという限界がある。つまり、ローザであれ、クウェンティンの父親であれ、クウェンティン自身であれ、シュリーヴであれ、彼らは自分との関係性においてしかサトベンを捉えることはできない。全知的視点を持ち得ない彼らがサトベンに関心を示さなければ、彼は存在しないということである。逆に彼らがサトベンに関心を示し、サトベンのことを言葉によって表現するとき、つまり彼らが「心」あるいは「意識」に取り込んだとき、サトベンは存在していたのであり、存在しているということになる。

サトベンがヨクナパトウファ郡に現れたときも同じようなことであった。サトベンがヨクナパトウファ郡に、あるいはジェファソンに現れたときの状況は、それは1833年の6月の「あの日曜日の朝」であるが、次のように説明されている、“That Sunday morning in June... when the other men sitting with their feet on the railing of the Holston House gallery looked up, and there the stranger was.” (*Absalom, Absalom!*, 31)。ここでいう「余所者」とはサトベンのことである。サトベンは、ジェファソンの人たちが目を上げてみると、そこに「いた」のである。彼はジェファソンの人たちが彼に気づいたとき、つまり彼に関心を示したとき、ヨクナパトウファ郡で「存在」し始めたのである。ジェファソンの人たちと言う他者が彼に関心を示さなければトマス・サトベンは存在しなかったのである。

クウェンティンには、かりにサトベンが「いつ」、「どこ」で生まれたかを言っていたとしても、それを確認することはできない。出生地なら、誰かがその場所へ行くことはできるだろう。しかしその場所へ行ったからといって、そこが彼の出生地であるという保証はない。ましてや「いつ」生まれたかについては、誰にも時間を遡ることはできないのだから、確認しようとするこゝとさえ不可能である。ヨクナパトウファ郡に姿を現したサトベンであろうがなかろうが、人は、あるところで誰か他の人が関心を示すとき、「そのときそのあるところにいる」のである。生年月日という日付が明確な誕生の証であるかどうかはそれがその人以外の誰か

によって確認され、保証されているかどうかということである。

サトベンの墓にも、エレンの墓にも没年月日は刻まれている。サトベンの場合には娘のジュディスが確認したからであり、エレンの場合はジュディスが確認し、後にサトベンが追認し、保証したからである。誰かの没年月日を確認し、保証するのは別の誰かであり、別の誰かでしかない。誰かの没年月日は他の誰かとの関係性においてしか存在しない。サトベンとエレンの墓の大きな違いはエレンの墓石には生年月日が刻まれているの対し、サトベンの墓石にはそれが刻まれていないということである。クウェンティンはサトベンの墓碑に出生地と生年月日が刻まれていないこと、そしてそれを刻まなかったのはサトベンであるから、サトベンが意図的にそれを刻まなかったとしている。しかし家族という小さなあるいは最小単位の社会を含め、人が社会的存在であり、社会的でなければ存在しえないのであれば、生年月日もまた誰か他の人による確認と保証が必要となる。そもそも自分の誕生を確認し、保証しうる者はいない。誰も自分の誕生を目撃し、確認することはできない。

人が自分の生年月日について知るのはいわゆる物心がついた頃からである。そのときでさえ、生年月日だとされている日付がどういうことなのかわかるわけもない。せいぜいが、自分の誕生を知っている他の誰かに教えられて、認識力の高い子が何年何月何日に生まれたということを知るくらいである。そしてその何年何月何日という日付が自分の誕生日であると信じているに過ぎない。他の誰かによって自分の生年月日だと言われている日付を自分の生年月日であると信じていく。それが可能なのは親を含め、他の誰かが生年月日を確認し、保証しているからである。

サトベンと同じようにエレンもまたヨクナパトウファ郡へ他の地域から移ってきた人であった。サトベンと違うのは彼が単独で現れたのに対し、彼女は父親と一緒にであったことである。そしてエレンは父親と住んでいた。彼女には彼女の誕生を、つまり彼女の生年月日を確認し、保証できる他の誰かがいたのである。彼女が生まれたのはテネシー州であった。それを前提にすれば、サトベンは墓石に「1817年10月9日」という日付を彼女の確かな生年月日として刻むことができたのである。

しかしサトベンは1833年に単独で突然ヨクナパトウファ郡もしくはジェファ

ソンへ現れ、土地の人たちが、気がついたときには「そこ」にいた人である。そうであれば、彼の生年月日を確認し、保証できる人はヨクナパトウファ郡にはいなかったということになる。ヨクナパトウファ郡という社会の中で捉えるとき、サトベンの生年月日は不明である。彼の生年月日はヨクナパトウファ郡の誰にも確認し、保証しうるものではないからである。ある意味では確かなものを残したい彼には不明なものを自分の墓石に刻むわけにはいかなかったということになる。彼は当時のヴァージニア州、そこから1863年に分離したのがウェスト・ヴァージニア州であるから現在のウェスト・ヴァージニア州で1807年に生まれたことになっている。けれども、それを確認した人はヨクナパトウファ郡にはいない。人は生まれてきたのであれば、当然生年月日はあるわけだけれども、その生年月日は誰か他の人によって確認され、保証されたとき初めて生年月日として認定されるわけであるから、確認し、保証する他の誰かがいなければ、生年月日は不明のままであり続けるしかない。没年月日が当の本人にとっては確認できず、不明のままであり続けるように。自分の死亡年月日を確認できる人はいない。

サトベンは、彼にも両親がいる、あるいはいたのだから、自分の生年月日を知ってはいたであろう。死んでさえ自分の生年月日を漏らそうとしなかったとなっているから、生前のサトベンは誰にも自分の生年月日を言っていなかったということである。彼が知っていたということを前提にすれば、クウェンティンが言うように彼は死んでさえ、「どこで」「いつ」生まれたかを漏らそうとしなかったということになる。しかしサトベンには自分で確認することができない不明な没年月日が刻めなかったように、不明な生年月日もまた刻めなかった。あるいは彼の没年月日を後になって墓石に刻みうる他の誰かがいたように、彼の生年月日を確認し、保証できる他の誰かがいたとしたら、その誰かが刻むことはできたのである。人は自分で墓を建てる場合、生年月日と没年月日は空白しておくしかない。自分で墓を建てない場合でも、自分の生年月日と没年月日を確認することはできないのだから、その2つは埋葬された人にとっては空白でしかない。サトベンは自分で自分の墓を用意した。死んでもなお彼には彼が彼であることを確認する意思があったということである。それでいて、サトベンが自分の墓碑に生年月日と没年月日を刻まなかったのは、あるいは刻みえなかったのは存在と時間の根本のところでは彼自身が「いるということ」を、あるいは「いたということ」を確認で

きなかったからである。彼に確実に確認できていたことは存在証明の最小単位である自分の姓名であった。

トマス・サトベンという姓名も、よくよく考えれば、彼がトマス・サトベンであると名乗ったからであり、名乗っただけでは彼がトマス・サトベンであるという条件は満たさず、他の誰かが彼の姓名はトマス・サトベンであると認め、彼をトマス・サトベンと呼んだからである。それは社会的関係性の問題であり、その関係性において彼はトマス・サトベンであると認知されていたからである。実はトマス・サトベンという姓名は偽名で、彼の本名はジェームズ・エドワード・ホープであったかも知れない。もしかりにそうであったとしても、ジェームズ・エドワード・ホープはヨクナパトウファ郡では彼がそうだと名乗らず、名乗らなかったために、認知されていないのだから、彼の姓名ではない。かりにトマス・サトベンが偽名であったとしても、彼はヨクナパトウファ郡において、また「南部連邦国」においてトマス・サトベンとして認知されていたのだから、彼の姓名はトマス・サトベンである。そして彼は1861年に突如出現し、1865年に消え、彼が亡くなった年には幻となっていた「南部連邦国」において認知され、彼が選び取った「南部連邦国第23ミシシッピ歩兵連隊大佐」であった。彼が亡くなったとき、「南部連邦国」がもはや幻でしかなかったのであれば、「南部連邦国第23ミシシッピ歩兵連隊大佐」もまた幻であった。

始めと終り

The Sound and the Fury は3人の独白と1つの全知的な視点から描かれている4部構成の小説である。3人とはCaddy [Candace] Compsonという女の兄 (Quentin) と2人の弟 (Jason, Benjamin [Benjy]) である。第1部が“April Seventh 1928”と題されたベンジーの独白、第2部は“June Second 1910”と題されたクウェンティンの独白、第3部が“April Sixth 1928”という題のジェイソンの独白、そして最後が“April Eighth 1928”と題する全知的な語りの部となっている。第4部はディルシーを軸にして書かれている。

The Sound and the Fury の時間は、あるいはその「現在」は1928年の4月6日から8日までの3日間である。間に18年前の1910年6月2日を挟んでいる。フ

オークナーが執筆時の「現在」に物語の時間軸を置いて物語世界を構築する作家であることを考えると、クウェンティンの独白の部が1928年4月5日でも4月9日でもなく、1928年から18年も遡った1910年に設定されているのは異様にも思える。しかしこれは1928年4月6日から8日までを「現在」としている限り、必然的な設定であったと言わなければならない。なぜなら、フォークナーが1956年に*The Paris Review*のインタビューに答えて、“It [*The Sound and the Fury*]’s a tragedy of two lost women: Caddy and her daughter” (Malcolm Cowley ed., *Writers at Work*, 130) と語っているように、*The Sound and the Fury*は道を踏み外した2人の女、キャディーとその娘（キャディーの兄クウェンティンと同名）の悲劇だからであり、キャディーの娘クウェンティンはキャディーの兄クウェンティン1910年6月2日に自殺した後に生まれ、1928年には17歳になっているからである。

しかしキャディーや娘クウェンティンが物語に直接登場することはない。2人が登場するのは3人の独白の中においてであり、全知的な視点の「1928年4月8日」にも直接登場することはない。最初の3部は独白であるから、そこに2人の直接登場する余地がないのは当然のことであるとしても、全知的視点で描かれた第4部にも直接登場することがないとなれば、果たして*The Sound and the Fury*はキャディーとその娘の物語であり、悲劇であるのだろうか、ということになる。しかし、*The Sound and the Fury*は、作者フォークナーが言っているように、キャディーとその娘、クウェンティン、の物語である。それはベンジーとクウェンティンの独白がキャディーに纏わることに、そしてジェイソンの独白がキャディーとその娘クウェンティンに関わることに収斂しているからである。但し、娘クウェンティンはキャディーの兄クウェンティンの自殺後に生まれているから兄クウェンティンの独白にも登場することはない。独白が独白者の心の世界を、言い換えれば独白者が経験したことを全感覚によって意識的にまた無意識のうちにも受け入れ、記憶していることを言葉にして外在化するものであるから、3人の独白は彼ら3人が2人の女とどのような関わりを持ったかを、あるいはその関わりを全感覚によって認識し、記憶していたものを表している。

しかし独白は独白者の視座を通してのみ語られるものである。その限り、それは独白者単独の限られた視座でしかない。物語そのものがある人物（独白者）の内面を吐露することによって、つまり徹底して個別化されたものから、徹底して

個別化することによって全体への糸口を提示することを意図しているとすれば、視座が単独の独白者の視座に限定されていてもまったく問題ではない。しかし作者フォークナーは、*The Sound and the Fury* はキャディーとその娘の悲劇であるという。つまり *The Sound and the Fury* においては3人の独白者の内面を描くことのみを意図しているのではなく、3人の独白を通してキャディーについて、そしてその娘クウェンティンについて描き出そうとしていたのだという。それは独白者との関係性において、つまり家族という社会の中でお互いを深く認識できる兄弟姉妹という関係性においてキャディーを、その娘クウェンティンを捉えようとしたということである。しかし独白に登場する人物は物語そのものからは姿を隠していて、物語にその声（言葉）だけを響かせている独白者だけである。人が社会的存在であり、社会的存在であれば、他の誰か（他者）との関係性が必要であり、その関係性において確認されて、その存在が保証されるものであるとすれば、独白においては、誰か他の人の存在を確認する者はいても確認される者は確認する者の語り（意識）の中にしかいないのだから、登場人物としての両者の関係性はない。フォークナーはキャディーとの関係性が濃密な3人の兄弟の、独白の後に全知的視点の部を設け、物語の「現在」に必要な人物を登場させて相互の関係性を確立し、キャディーの、そしてその娘クウェンティンの姿を実体化しようとしたのである。しかしそのとき、つまり「1928年4月8日」の「現在」において、すでに姿を消して、他の登場人物の声（意識）の中にしか存在しないキャディーのみならず、娘クウェンティンもまた姿を消し、声（意識）の中の存在に変わっているのである。しかし、キャディーを、そして娘クウェンティンをその社会的関係性において認識し、その意味でキャディーや娘クウェンティンの存在を確認し、保証する者がいることによってキャディー親子は *The Sound and the Fury* の中にいることになる。そしてこの関係性において *The Sound and the Fury* がキャディーとその娘クウェンティンの悲劇であるとするれば、2人の悲劇であるということになるのである。そしてその悲劇とは何か。それは2人の女が自分たちの内面に忠実であることに、即ち2人が「自然」であることによって自分の属する社会（コンプソン家）で社会的関係性を維持することができなかった、即ち自分の属する社会において存在を否定されたという悲劇である。

キャディーはディルシーがその誕生を、つまりその存在を確認して以来、自

然な（社会的規範から外れて）成長を遂げて、成熟する。成熟した彼女は彼女自身の意志では制御することのできない「内なる自然」（ここでは性衝動を指すが）に衝き動かされ、「社会的規範」から外れて、妊娠する。社会は婚外妊娠を容認しない。彼女は「社会的規範」に従って胎児の父親ではない男と、つまり歪められた（不自然な）形で、「結婚」する。そして女兒を出産した後、「離婚」され、生まれた女兒を実家であるコンプソン家に置いて再び消え、住処も配偶者も定まらないままになっている。今また娘のクウェンティンが母親キャディーと同じように、彼女の場合はジェファソンの町へ興行で来ていたサーカスの男と駆け落ちをしてコンプソン家から消える。その行く先はコンプソン家の人にはわからない。

「1928年4月8日」の「現在」、そしてその日は復活祭の日曜日でもあるのだが、キャディーも娘クウェンティンもコンプソン家にはいない。生身の人間としての2人は姿を消している。

ディルシーが教会からの帰りに娘の Frony と一緒に歩いているときの場面は次のようになっている、

“Whyn’t you quit that, mammy?” Frony said. “Wid all dese people lookin. We be passin white folks soon.”

“I’ve seed de first en de last,” Dilsey said. “Never you mind me.”

“First en last whut?” Frony said.

“Never you mind,” Dilsey said. “I seed de beginnin, en now I sees de endin.” (*The Sound and the Fury*, 371)

フロニーは母親に涙を流すのはもう止めたら、と言っている。他の人たちみんなが見ているのだし、もうすぐ白人たちともすれ違うことになるのだから、というのが、フロニーがディルシーに涙を流すのを止めるように勧めた理由である。しかし娘の言葉にディルシーはまったく構わずに『私は始めと終りを見てきた』と言っている。そしてフロニーが『何の始まりと終り?』と訊ねても、それにも構わずに、『私は始まるのを見たし、今終わるのを見ている』と言っている。2人の間の会話は意味をなさない。そしてフロニーの問いにディルシーが答えていないのだから、私たち読者にも「何の始まりと終り」なのかはわからない。

しかしディルシーはコンプソン家にずっと仕えている黒人のメイドで、コンプソン家での出来事を見てきた人である。そして *The Sound and the Fury* がキャディーとその娘クウェンティンの悲劇として意図されていることを考えると、「何の始まりと終り」であるのが推測できる。ディルシーはコンプソン家でキャディーが生まれたのを確認して、保証し、キャディーがコンプソン家から消えざるを得なかったことを確認し、コンプソン家に預けられていたその娘クウェンティンまでもがコンプソン家から消えたことを見ている、つまり確認している人だからである。

もう一度ディルシーが「始まりと終り」を見たと言う場面がある。

Dilsey went out. She closed the door and returned to the kitchen. The stove was almost cold. While she stood there the clock above the cupboard struck ten times. "One oclock," she said aloud, "Jason aint comin home. Ise seed de first en de last," she said, looking at the cold stove, "I seed de first en de last." (*The Sound and the Fury*, 375)

時計が10回打つのを聞いて、ディルシーは1時と言っている。この時計は針が1本欠けた時計である。「1時」に10回打ったということである。コンプソン家の時計は針が欠けているのみならず、狂った時刻を告げている。始めと終りは、狂った時計が狂った時刻を示す中で確認されている。狂った時間の変化に合わせて進行する社会の営みは人工的な社会的規範という「自然」の営みとは異なった「原理」で自然を追放する。しかし人はその社会的規範、あるいは社会的関係性の中で生きていくことを余儀なくされている。人の自然な誕生が他者の確認によって社会での「始まり」を持ち、自然な死が、あるいは死が他者に確認されることによって、あるいは他者の関心から消えることによって社会での「終り」を持つとすれば、それを徹底して社会的関係性の中の置き、その始まりと終りを検証してみると、*Absalom, Absalom!* の物語が生まれる。そして人が他者との関係性において、あるいは他者による確認によって、生きていることが保証されていることになるのであれば、自分の存在の確認と保証のために墓を用意したトマス・サトベンが自らの出生年月日を墓碑に刻み得なかったのは自己認識に対し誠実であったと言える。

- Faulkner, William. *Absalom, Absalom!*. New York: Random House, 1964.
- Faulkner, William. *The Sound and the Fury*. New York: Random House, 1956.
- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. Vol. 1, New York: Random House, 1974.
- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. Vol. 2, New York: Random House, 1974.
- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. New York: Vintage Books, 1991.
- Gwynn, Frederick L. and Blotner, Joseph. (eds.) *Faulkner in the University*. New York: Vintage Books, 1965.
- Molpus, Dick (Secretary of State). *The Mississippi Official and Statistical Register 1984-1988*. Office of the Secretary of State, 1985.
- Morris, Willie. *The Terrains of the Heart and Other Essays on Home*. Oxford, Miss.: Yoknapatawpha Press, 1981.